

【富岡康一教諭（東京学芸大学附属特別支援学校）の実践から】















詳しい解説は、このホームページを参照

http://homepage2.nifty.com/tomy_s/index.htm

「反対言葉」の学習

大きい小さいから長い短い、高い低い・・・と様子を表す言葉に進む。いずれも相対的な様子を表す言葉なので、比較対照となるもの二つ一組で教えるとイメージをつかみやすい。



ながい	みじかい	ひろい	せまい
ながい	みじかい	おおきい	ちいさい
ふとい	ほそい	おおきい	ちいさい
		たかい	
		ひくい	
			
			
			

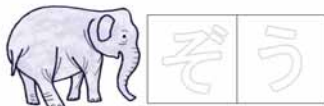
パズルを使った「文字を読む」学習

なかなか教材に興味を示してくれない子が、8ミリケースパズルに反応してくれた。しかしケースに入れるのが難しい。そこで、このような木の枠を作った。木枠に収納した時点で完成にして、8ミリケースに片づけるのは指導者が行う。

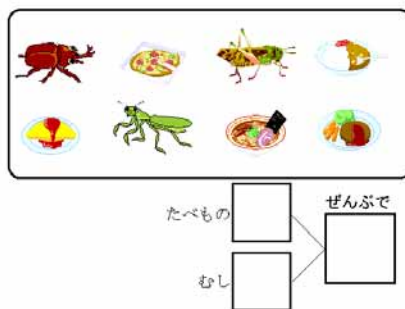
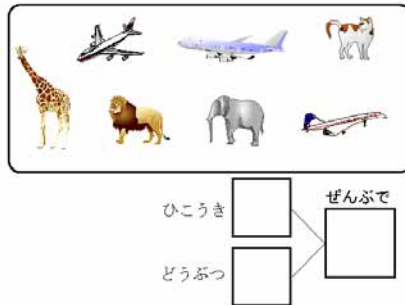


「なぞり書き」の学習

これからひらがなの形を覚えようとする段階の教材である。ただし、一定程度の発達段階に達する以前になぞり書きをやっても効果は薄いばかりでなく、指導の仕方によっては子どもに過重な負担をかけてしまうことがある。書字指導には段階があるので、このことを充分踏まえた上で活用して欲しい。書字指導に入る段階にあるかどうかを最も簡便に予想するには、マルが閉じるかどうか（鉛筆で円を描けるかどうか）が一つの目安となる。ただし、これは極めて簡易に予想するだけにとどまる。なぞり書きの前段階として、迷路をはみ出さずにたどる、6点結び以上ができる等が考えられる。



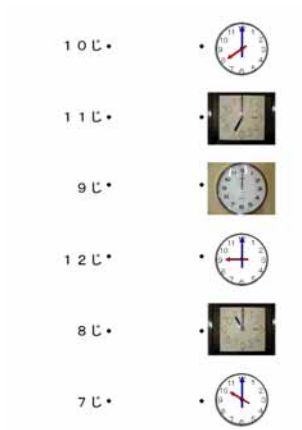
「全部でいくつ？」の学習
たし算の基礎的な学習。



「時計」の学習

1. まずは短針が指す数字に着目できるようにする。
2. 「〇じ」という読み方とマッチングさせる。
3. 異相の時計の写真でマッチングさせる。
4. 異相の画像と読みをマッチングさせる。

ここまでできれば、プリント上で正時を読むことはできると評価して良い。プリント上でできるようになったら、実際の時計を読むことに移行するのだが、その前のワンクッションとして写真カードの時計を見て「〇時」と読めるようにしておくこと次のステップへの移行がスムーズだろう。はじめはプリントで学習したものを利用し、慣れてきたらいろいろな時計の画像を織り交ぜていく。カードを見て「〇時」が言えるようになったら、実際の時計に移行する。電池を抜いた時計を用意し、目の前で針を操作して動かして見せ、「〇じ」と答えられるようにする。学習場面で時計が読めるようになることと、実際の生活に生かせるようになることが直結しないのが自閉症児の難しいところである。こうした学習を積み重ねると同時に、日常生活の場面でも時計を意識できるように指導していく。そのためには教師自身が時間を守り、常に時計を意識して活動している様子を体現することが早道であると思う。



「多側面質問」の学習

一つの事物を様々な角度からとらえることをねらいとする本教材（多側面質問）は、一枚の絵を見せながら口頭で発問するのが常套であるが、ここでは発問内容をプリントにした。このことで、子どもは回答を選択肢から選ぶことができ、難易度は低下する。たとえば、リンゴのプリントでは「これは何の仲間ですか？」という発問に口頭で答えられなくても、「乗り物、果物、動物」という選択しから果物を選択することは可能になる。

これは なんですか			
やさい	ケーキ	のりもの	のあもの
いくつありますか			
1	2	3	4
あまいですか からいですか			
からい		あまい	